

安慧の布施積

——『大乘莊嚴經論』安慧積の和訳——

矢板 秀 臣

序

本稿は、『大乘莊嚴經論(Mahāyānasūtrāṃkāra. 以下 MSA)』において説かれる布施(dāna)の思想を研究する一環として、同経に対する安慧(Sthiramati)の注釈書(Mahāyānasūtrāṃkāravṛttibhāṣya. 以下 MSAVBh)に注目し、布施が説かれている箇所の和訳を提示するものである。

MSA 第 16 章 Pāramitādhikāra(度摂品)においては、六波羅蜜(布施、戒、忍辱、精進、静慮、智慧)が説かれる。そこでは六波羅蜜それぞれが、十項目を基準として詳しく説明されている。十項目は、同章第 1 偈に挙げられている通り、⁽¹⁾数(samkhyā)、⁽²⁾相(lakṣaṇa)、⁽³⁾次第(anukrama)、⁽⁴⁾解釈(nirvacana)、⁽⁵⁾修習(bhāvanā)、⁽⁶⁾差別(prabheda)、⁽⁷⁾包摂(samgraha)、⁽⁸⁾所治(vipakṣa)、⁽⁹⁾功德(guṇa)、⁽¹⁰⁾相互決定(anyonyaviniścaya)である。¹

これら十項目の中、本稿では、六波羅蜜のうちの布施について、特に重要と思われる⁽⁶⁾差別(prabheda)と⁽⁹⁾功德(guṇa)、の箇所を扱うものである。

MSA 第 16 章については、周知のように、長尾雅人博士による徹底した研究、即ち、長尾 2009 があり、本稿は大いにこれに基づいている。博士はそこで、世親積の原文と和訳を提示し、さらに安慧と無性(Asvabhāva)の両注釈、即ち、MSAVBh と MSAT とを十分に参照されている。従って、思想的にはすでに解明されていると言えようが、布施思想の重要性に鑑み、ここにあえて安慧積の和訳を提示するものである。²

¹ Cf. MSA XVI v.1: samkhyātha tallakṣaṇam ānupūrvī niruktir abhyāsaguṇaś ca tāsām / prabhedanam samgrahaṇam vipakṣo jñeyo guṇo 'nyonyaviniścayaś ca // (長尾 2009 p.9.)

² 筆者はこれまで、六波羅蜜に注目し、『瑜伽師地論』の中、『菩薩地(Bodhisattvabhūmi)』第 9 章「施品」、第 11 章「忍品」、第 12 章「精進品」、第 13 章「静慮品」、第 14 章「慧品」につき、原典研究に基づいたサンスクリットテキストと和訳とを提示してきた。それらは順に、矢板 2008、矢板 2019、矢板 2020、矢板 2011、矢板 2021、である。また、本稿と同じく『大乘莊嚴經論』安慧積を和訳した矢板 2007 もある。

シノプシス

六波羅蜜について考察する十項目のうちの第六、⁽⁶⁾差別(*prabheda*)は第 17 偈から第 28 偈までで扱われるが、布施については第 17 偈と第 18 偈で説かれる。布施に関して、六つの概念を設定して布施を考察する。六つとは、本質(*svabhāva*)、因(*hetu*)、果(*phala*)、働き(*karma*)、結合(*yoga*)、生起(*vr̥tti*)の六であり、布施の本質とは？、布施の因とは？、というように布施について深く考察し説いている。

次に、同じく十項目のうちの第九、⁽⁹⁾功德(*guṇa*)が第 36 偈から扱われる。六波羅蜜それぞれに四つの功德があるとされ、广大性(*audāryatva*)、無貪欲性(*anāmiṣatva*)、大義性(*mahārthatā*)、不滅性(*akṣayatā*)がそれである。

布施の四功德を説くのが第 36 偈であり、同偈の第一詩節から第四詩節がそれぞれ布施の四功德を説明している。諸菩薩が自己の外的な物も内的な物もどちらも施捨し、いつでも施捨する、という广大性(*audāryatva*)や、慈悲の力によって施捨し、結果を求めて衆生を救おうとするのではないという、無貪欲性(*anāmiṣatva*)などが、説かれている。

第 43 偈においては、布施の優れた功德(*guṇa*)が説かれている。乞い求める人は施物を得て喜ぶが、菩薩はそれより大いに喜び、また乞い求める人が満足できない場合には、その人の悲しみより大きく菩薩は悲しむ、という。

第 52 偈以降においても六波羅蜜の功德が説明されるが、安慧は「[第 52 偈からの]六偈は、六波羅蜜が究極であり、最高であり、最上であり、最善であることを説く」としている。そして第 52 偈では、最高の布施が説かれる。

布施の八種の要素が最高であることにより、布施は最高である、という。八種の最高とは、最高の⁽¹⁾依所(*āśraya*)、最高の⁽²⁾事物(*vastu*)、最高の⁽³⁾動因(*nimitta*)、最高の⁽⁴⁾廻向(*pariṇāmana*)、最高の⁽⁵⁾原因(*hetu*)、最高の⁽⁶⁾智(*jñāna*)、最高の⁽⁷⁾福田(*kṣetra*)、最高の⁽⁸⁾依拠(*niśraya*)、である。

まず初めの⁽¹⁾依所(*āśraya*)については、布施は、菩薩(*bodhisattva*)という最高の⁽¹⁾依所(*āśraya*)を持つことにより、それは最高の布施である、とされる。また、第七の⁽⁷⁾福田(*kṣetra*)には五種あるが、菩薩は、第五の有徳者(*guṇavat*)よりも、求める者、苦しみ、依所の無い者、悪行を行う者、の四者を重要視して、この四者を優先的に施捨する、とする。

参考文献及び略号

<一次文献>

- AMN Akṣayamatinirdeśasūtra. J.Braarvig, *Akṣayamatinirdeśasūtra, vol.1.* Oslo, 1993.
- D sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka. 『デルゲ版チベット大蔵経 東京大学文学部所蔵』.
- DāP Dānapāṭala, the 9th chapter of the Bodhisattvabhūmi. See 矢板 2008 (Text: pp.193-207 = pp.1^{*}-15^{*}).
- P Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka. 『影印北京版西藏大蔵経』
- MSA Mahāyānasūtrālamkāra. See 長尾 2009.
- MSA_{Tib} D No. 4020, P No. 5521.
- MSABh Mahāyānasūtrālamkārabhāṣya (Vasubandhu). See 長尾 2009.
- MSABh_{Tib} D No. 4026, P No. 5527.
- MSAVBh Mahāyānasūtrālamkāravṛttibhāṣya (Sthiramati). D No. 4034, P No. 5531.
- MSAT Mahāyānasūtrālamkāraṭīkā (Asvabhāva). D No. 4029.
- Tib Tibetan translation.

<二次文献>

- 長尾 2009 長尾雅人『「大乘莊嚴経論」和訳と註解 — 長尾雅人研究ノート — (3)』長尾文庫。
- 矢板 2007 矢板秀臣「菩薩の悲(karuṇā)—『大乘莊嚴経論』安慧釈和訳—」(成田山仏教研究所紀要 第30号, pp. 103-153)。
- 矢板 2008 同「菩薩の布施—『菩薩地』布施品の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第31号, pp. 157-207)。
- 矢板 2011 同「菩薩の瞑想—『菩薩地』静慮品の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第34号, pp. 79-105)。
- 矢板 2019 同「菩薩の忍—菩薩地『忍品』の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第42号, pp. 31-61)。
- 矢板 2020 同「菩薩の精進—菩薩地『精進品』の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第43号, pp. 27-50)。
- 矢板 2021 同「菩薩の智慧—菩薩地『慧品』の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第44号, pp.19-35)。

安慧釈和訳

(MSA XVI vv.17-18)³ <MSAVBh D18a5~ ; P 21a4~>

「種別(prabheda)についての偈(śloka)」⁴などと言う。[v.16 で]六波羅蜜の修習(bhāvanā)を解説した後、これより種別(prabheda)を解説する。⁵

六波羅蜜を分解すれば無量であるが、まとめると、それぞれの波羅蜜ごとに、本質(svabhāva)などの六種類⁶があると知られる。その[六種類]が[六]波羅蜜それぞれにつき二つの偈⁷によって説かれる。こうして 12 の偈[、即ち、vv.17-28 に説かれるの]である。

「(1)ものを[人に]付与すること」(= v.17a: pratipādanam arthasya)と言う。苦田と三福田(*tri-punyaḥṣeṭra)[即ち、敬田、恩田、悲田]に対して、⁸外的・内的なるものを施与することが、布施(dāna)の本質(svabhāva)である。

「(2)[善]根を抛り所とし[て生じる]意思」(v.17b: cetanā mūlānīṣṛitā)と言う。「根」という言葉は三つの善根(kuśalamūla)のことである。即ち、離貪欲(*vitarāga)、不瞋恚(*adveṣa)、不邪見(*amoha)という三善根を具えた意思(cetanā)が、布施の所依であり[布施の]因(hetu)である⁹。というのは、これら三[善根]に基づいて布施は生じ

³ MSA vv.17-18: pratipādanam arthasya cetanā mūlānīṣṛitā/ bhogātmabhāvasaṃpatī dvayā-nugrahaṇapūrakam// ||17|| amātsaryayutaṃ tac ca dattaṃ dharmāmiṣābhaye/ dānam evaṃ parijñāya paṇḍitaḥ samudānayet// ||18|| 「(1)ものを[人に]付与すること、(2)[善]根を抛り所とし[て生じる]意思、(3)[ものの]享受[の卓越]と身体の卓越、(4)[自他]両者を饑益し[大菩提を]円満する[布施]、(5)吝嗇でないことを具備[する布施]、(6)法と財物と無畏を以てそれ(=布施)が与えられる。智者はこのように布施を熟知して必ずや[布施を]完成させるのである」。

⁴ Cf. MSABh ad v.17: tatra dānaprabhede dvau ślokaḥ. (長尾 2009 p.35,18.)

⁵ 序文において触れたように、MSA XVI (大乘莊嚴經論 第 16 章)において六波羅蜜が十の項目について解説される。十の項目とは、¹数(saṃkhyā)、²特質(lakṣaṇa)、³順序(anukrama)、⁴語義解釈(nirukti)、⁵修習(bhāvanā)、⁶種別(prabheda)、⁷包摂(saṃgraha)、⁸対治(vipakṣa)、⁹功德(guṇa)、¹⁰相互決定(anyonyaviniścaya)、の十である。第 16 偈で⁵修習(bhāvanā)が解説され、第 17 偈から⁶種別(prabheda)が解説される。第 17 偈と第 18 偈は、六波羅蜜のうち、布施の種別(prabheda)が解説される。

⁶ すなわち、本質(svabhāva)、因(hetu)、果(phala)、働き(karma)、結合(yoga)、生起(vṛtti)の六である。次の第 17 偈と第 18 偈の中で、布施についてのこれら六種がそれぞれ、v.17a、v.17b、v.17c: v.17d、v.18a、v.18b において説かれる。

⁷ D,P: tshigs su bcad pa gñis gñis kyis ston te であるが、gñis を一つ省いて読む。

⁸ Cf. MSABh ad v.17a: arthapratipādanam pratigrāhakeṣu dānasya svabhāvaḥ. (長尾 2009 p.35,23.) 「受け取る人たちにものを与えることが布施の本質である」。

⁹ Cf. MSABh ad v.17b: alobhādisahajā cetanā hetuḥ. (長尾 2009 p.35,23.) 「無貪等と共に生じた意思が[布施の]因である」。

るからである。

「(3) [ものの]享受[の卓越]と身体[の卓越]」(v.17c: bhogātmabhāvasampattī)と¹⁰言う。身体[の卓越]の獲得と[ものの]享受[の卓越]の獲得とは、布施の**結果(phala)**である¹¹。内的な物を[他者に]恵施することにより、[立派な]色と形そして長寿を具えた身体を獲得できる。また、外的な物を恵施することにより、財宝や穀物等の資財の卓越という、[ものの]享受[の卓越]を得られるのである。

「(4) [自他]両者を饒益し[大菩提を]円満する[布施]」(v.17d: dvayānugraha-pūrakam¹²)と言う。自他の両者を豊かにし福德(puṇya)と智慧(jñāna)の集積を充滿させるのが、布施の**働き(karman)**である¹³。貧窮者達に財利(āmiṣa)を布施することにより他衆生を豊かにし、他衆生を利益し、これを基に未来に自分自身大いに享受しては、さらに他者を豊かにし、自己を利益する。こうして、[三施のうちの法施、即ち]法(dharma)の布施によって智慧(jñāna)の集積を充滿させ、無畏(vaiśāradya)と財利(āmiṣa)の布施[、即ち無畏施と財施]によっては福德(puṇya)の集積を充滿させる¹⁴。

『五処経(Pañcasthānasūtra)』にあるように」と[世親釈(MSABh)]に言われている¹⁵。『五処経』に-----

「他者に食べ物[を]施すことによって、五処が獲得される。即ち、
寿命(āyus)、色相(varṇa)、力(bala)、安樂(sukha)、弁才(pratibhāṇa)の
卓越である」

と説かれているように。

「(5) 吝嗇でないことと結合する[布施]」(v.18a: amātsaryayutaṃ tac ca)と言う。吝嗇がある者には布施は無く、布施がある者には吝嗇は無い、という法則があ

¹⁰ MSA_{Tib} v.17c : lus dañ loṅs spyod phun tshogs dañ.

¹¹ Cf. MSABh ad v.17c: bhogasampattir ātmabhāvasampattīś cāyurādīsamgrhītā phalam. (長尾 2009 p.35,23-24.) 「[ものの]享受[の卓越]と、寿命等と含めての**身体[の卓越]**とが、[布施の]結果である」。但しチベット訳(MSABh_{Tib})は、MSA v.17cの場合と同様に、サンスクリット文と異なって、「享受[の卓越]」と「身体[の卓越]」の順序が逆になっている : 'bras bu ni lus phun sum tshogs pa che la sogs pas bsdus pa dañ loṅs spyod phun sum tshog pa ste.

ところでMSABh(チベット訳も)では、この直後に、Pañcasthānasūtravat(『五処経』にあるように)とある(長尾 2009 p.35,24.)。これについての安慧積は、この後の拙訳にあるように、次のv.17d句の注釈の直後に出てくる。

¹² MSA_{Tib}, MSABh_{Tib} : gñis rjes 'dsin dañ rdsogs byed dañ. MSAVBh: bdsu ba gñis dañ bskañ ba dañ.

¹³ Cf. MSABh ad v.17d: svaparānugraho mahābodhisambhāraparipūriś ca karma. (長尾 2009 p.35,24-25.) 「自他[の両者]を**饒益**することと、大菩提への資材を円満することとが、[布施の]働きである」。

¹⁴ Cf. 長尾 2009 p.37,注3.

¹⁵ この『五処経』については、長尾 2009 p.36-37 参照。

るから、[布施は]無吝嗇という性質と結合している¹⁶。

「(6)法と財物と無畏を以ってそれ(＝布施)が与えられる」(v.18b: *dattam dharmāmiśābhaye*)と言う。布施は、三者[即ち、法、財、無畏]において性起する¹⁷。即ち、法施において[布施の]性起(*vr̥tti*)があり、財施において[布施の]性起があり、無畏施において[布施の]性起がある。それらのうち、聖典の意味や語句を正しく解説することが、法施としての[布施の]性起である。外的・内的なるものを[他者に]施与することが、財施としての[布施の]性起である。王・盗賊・火・水[等]の脅威から救済することが、無畏施としての[布施の]性起である。以上、[布施の]性起の意味が説かれた。

「智者はこのように布施を熟知して必ずや[布施を]完成させるのである」(v.18cd: *dānam evaṃ pariñāya paṇḍitāḥ samudānayet.*)。「このように」とは、上に[即ち、v.17-18ab に]説かれたように、即ち、布施の本質(*svabhāva*)、因(*hetu*)、果(*phala*)、働き(*karma*)など¹⁸、上に説かれたように、である。[このように]熟知して智者、即ち諸菩薩は、布施波羅蜜を完成させる、という意味である。

「無吝嗇により[人は布施を]行うから」という¹⁹。吝嗇ある者たちが布施を行うことはなく、吝嗇無き者たちが布施を行うのであるから、[布施は]無吝嗇という性質を具えている。²⁰

(MSA XVI v.36)²¹ <MSAVBh D26b1~ ; P30b6~ >

¹⁶ Cf. MSABh ad v.18a: *amātsaryeṇa yogaḥ, amatsariṣu vartate.* (長尾 2009 p.35,25.) 「[布施の]結合は無吝嗇と[結びつくこと]であり、[布施は]吝嗇無き者たちにおいて存在する」。

¹⁷ Cf. MSABh ad v.18b: *dharmāmiśābhayapradānaprabhedena ceti vr̥tṭiḥ.* (長尾 2009 p.35,25-26.) 「法、財、無畏の[三]施の区別をもって[布施の]性起がある」。

¹⁸ 結合(*yoga*)と生起(*vr̥tti*)を合わせた六種である。

¹⁹ 引用文のようであるが不明。MSABh にこのような文はない(チベット訳にも)。内容的に、MSA v.18a に関する文であり、これに続く文は、それに対する注釈のようである。MSA v.18a についての安慧釈は、これ以前にすでに終了している。MSA v.18cd に対する注釈の後に、どうしてこのような文章がここにあるのか、筆者には不明である。両方の文は内容的にほぼ同趣旨であるが、チベット訳であるが、文章としては異なっている。

²⁰ MSA v.18 に関する安慧釈はここ(D19a3; P22a4)で終わり、これに続く文は MSA v.19 についての注釈である。

²¹ *tyaktāṃ buddhasutaṃ svajīvitam api prāpyārthināṃ sarvadā kārūṇyāt parato na ca pratikṛtir neṣṭāṃ phalaṃ prārthitam/ dānaiva ca tena sarvajanatā bodhitrāye ropitā dānaṃ jñānaparigraheṇa ca punar loka 'kṣayaṃ sthāpitam//* ||36|| 「仏陀の子(＝菩薩)たちは、求める者に出会えば自分の命さえも、いつでも施捨するが、それは菩薩たちの慈愛からであり、他者からの報恩があるわけではなく、また望ましい果報を欲するものでもない。この布施によってこそ、一切の人民(*janatā*)が、三[乗、即ち声聞乘、独覺乘、大乘]の菩提へと育まれるのである。また布施というのは、智慧が包摂することによって、この世に不滅のものとして

「功德(guṇa)を分析して二十三の偈がある」²²という。[第 30 偈から 35 偈] 六波羅蜜の対治(vipakṣa)²³を説いた後、これから六波羅蜜の功德(guṇa)と、そして細分化しての功德を、二十三の偈によって説く、という意味である。

そのうち、[六]波羅蜜それぞれに四つの功德がある。四つとは、广大性(audāryatva)、無貪欲性(anāmiṣatva)、大義性(mahārthatā)、不滅性(akṣayatā)である²⁴。

「**仏陀の子(=菩薩)たちは慈愛によって、求める者に自分の命を惜しまず施捨する**」(v.36a: tyaktam buddhasutaiḥ svajīvitam api prāpyārthinam sarvadā, v.36b¹: kāruṇyāt.)という。「慈愛[によって](kāruṇyāt)」という[語]は、[第 36]偈の第一詩節(pāda)にも結びつくし、第二詩節の「報恩はない(v.36b: na ca prakṛtiḥ.)」という[語]にも結びつく。「仏陀の子」とは菩薩達のことである。菩薩達は、もし欲しがれる衆生が[何かを]求めれば、[自分の]体や命を、気にすることなく施捨する。食べ物や着る物などはもちろん、外的な物は言わずもがな、施捨するのである。従って、このように施捨しては、晴天には施捨するとか晴天には施捨しないとか、雨天には施捨するとか雨天には施捨しないとか、一刹那に施捨するとか一刹那に施捨しないとか、ということではなく、生死輪廻の最後でも、虚空世界の最果てでも、どのような場合でも、常時施捨しているということである。

このように[諸菩薩は]、外的な物も内的な物もどちらも施捨し、いつでも施捨するから、[第 36 偈の]第一詩節は广大性(audāryatva)を述べている。

「**他者からの報恩があるわけではなく、また望ましい果報を欲するものでもない**」(v.36b: [kāruṇyāt] parato na ca prakṛtir neṣṭam phalaṃ prārthitam.)という。「私が外的な物も内的な物も施捨すれば、私に対して衆生達が報恩するだろう」と考えて、報恩のために布施するのではなく、[諸菩薩は]不具足なる諸衆生に對

存在するのである」。

²² = MSABh ad v.36: gunavibhāge trayaviṃśatiḥ ślokaḥ. (長尾 2009 p.57,31.)

²³ MSA XVI (大乘莊嚴經論 第 16 章) において六波羅蜜が十の項目について解説されるが、その十の項目のうちの第八が対治(vipakṣa)である。これから説かれる功德(guṇa)はその第九である。本稿の序文参照。

²⁴ Cf. 長尾 2009 p.58. Cf. MSA v.42: audāryānāmiṣatvam ca mahārthākṣayatāpi ca/ dānādīnām samastam hi jñeyam guṇacatuṣṭayam// 「广大性、無貪欲性、大義性、不滅性が、布施等[六波羅蜜それぞれ]にある、まとめて四種の功德であると、知るべきである」。MSABh ad v.42: tatra dānādīnām prathamena pādenodāratā paridīpitā, dvitīyena nirāmiṣatā, tṛtīyena mahārthatā mahataḥ sattvārthasya sampādanāt, caturthenākṣayatā, ity eṣāṃ guṇacatuṣṭayam ebhiḥ ślokaire veditavyam. (長尾 2009 p.65-66.) 「この中、[第 42 偈の]第一句によって布施等[六波羅蜜]の广大性が説明され、第二句によって無貪欲性が、第三句によっては、大なる衆生利益を実現するので、大義性が、そして第四句によって不滅性が[説明された]。このように、これら[六波羅蜜それぞれ]の四種の功德が、これら[第 36 偈から第 41 偈]の[六]偈によって理解されるべきである」。

して、慈悲の力によって施捨す。布施した結果として大資産家になりたい、と考えて布施を行うのではない。[諸菩薩は布施の]結果を求めて[衆生を]救おうとするのではない。また、今生において報恩がなくても他生において[布施の]功德が異熟するだろうなどということ望まない。このように、この[第 36 偈の]第二の詩節²⁵は無貪欲性(anāmiṣatva)を説いている。

「この布施によってこそ、一切の人民(janatā)が、三[乗]の菩提へと育まれるのである」(v.36c: dānenaiva ca tena sarvajanatā bodhitraye ropitā.)という。さらに、[諸菩薩の]外的・内的な布施により、衆生達はその結果として世間的な財物に恵まれるのではなく、正しく[三乗、即ち]声聞乘・独覺乘・大乘へと育まれる。このように、この[第 36 偈の]第三の詩節は大義性(mahārthata)を説いている。

「布施というのは、智慧が包摂することによって、この世に不滅のものとして存在するのである」(v.36d: dānaṃ jñānaparigraheṇa ca punar loke 'kṣayaṃ sthāpitam.)という。凡夫達の布施は無分別智(nirvikalpajñāna)によって起こるのではなく、[彼らはそこに]施者・受者・施物の三[輪]が[別々に]在ると分別し、[布施することによってその恩恵としての]財物を獲得するために施捨している。そのような布施は輪廻(saṃsāra)に墮し、異熟としての財物は無く、布施も滅している。

しかし菩薩の布施は輪廻に墮すことはなく、不滅である。従って、聖なる『無尽意菩薩經(Akṣayamatīrdeśa)』にも「その布施は終わりなく[続けられ]²⁶、従って不滅である。その布施は[欲界・色界・無色界の]三界のものと混じり合うことなく²⁷、従って不滅である」²⁸等々と説かれている。

聖なる声聞(śrāvaka)達は、人無我(°pudgalanairātmya)のみを認知していて、大悲心(mahākaruṇā)から遠離しているために、無余依涅槃界(°nirupadhiṣeṣanirvāṇadhātu)へ趣入して滅する。[このように]涅槃のみを専一に考える。

一方、菩薩は、人と法とを無我(nairātmya)と観想し、大悲心により守護し、輪廻(saṃsāra)の果てまで、[全]衆生の最後まで、滞りなく[守護]する。

だから、[第 36 偈の]第四の詩節は不滅性(akṣayatā)を説いている。従って、聖なる『無尽意菩薩經(Akṣayamatīrdeśa)』にも「その布施はまさに施捨として確定しており、従って不滅である」²⁹等々と説かれている。

²⁵ D: tshigs bcad gñis pa, P: tshigs su bcad gñis pa. しかしここでは pāda として理解する。これに続く、第 36 偈の第三と第四の詩節についての安慧積では、tshig rkañ pa gsum pa, tshig rkañ pa bzi pa である。

²⁶ P: yañ dag par ma zin pa ste (D, AMN om. ma.). 長尾 2009 p.59、注 5 参照。

²⁷ D, P: sbyin pa de ni khams gsum pa dañ yañ dag par ma 'dres pa ste (AMN om. yañ dag par.).

²⁸ 長尾 2009 p.59、注 5 参照。AMN p.32,35-37.

²⁹ 長尾 2009 p.59、注 5 参照。引用箇所不明。

(MSA XVI v.43)³⁰ <MSAVBh D32a2~; P37a4~ >

「[物を]乞い求める者には、[施者と]出会って[物を得て]満足して喜ぶこと、また[それが叶わず]喜べないこと、また[施者と出会って満足したいとの]希望がある。そういうものを、慈悲深い施者は、[慈悲の]優越性をもって乗り越えている」(v.43)と言う。

これから六波羅蜜の功德(guṇa)をそれぞれ別々に説く。そのうちまず、布施波羅蜜の功德を述べる。

[物を]乞い求める人が、施捨する人と出会って喜ぶこともあり、また[物を]乞い求める人達が、施捨する人に「好きなだけ財物を自分で取りなさい」と諭されて、欲しいだけのものを施捨する人から獲得したり、また望み通りに[物を得て]満足して喜ぶこともある。また[物を]乞い求める人が施捨する人に出会わずに喜べないことや、望み通りには満足できず喜べないこともある。さらに、[物を]乞い求める人が施捨する人と出会っても思い通りにはならず、また、出会っても、好きなだけ自分で取りたいとしてその通りに獲得しても思い通りにはならないこともある。また、望み通りに満足して喜んだり、望み通りには満足せず喜ばなかったりする。

これらのこととは違って、菩薩が施捨者であれば、[物を]乞い求める人は出会えば喜びが生じる。乞い求める人は、欲しいと思う物をどれも施捨され、乞い求める人の思いは満たされ、喜びが生じる。同様に、施捨者は、乞い求める人が見えないと喜ばず、彼の思いは満たされず、喜べない。さらに、施捨者である菩薩は、乞い求める人に会うと、望み通りに心満足し、会ってから彼の心は満足し望み通りに満足し喜び、望み通りでないと思わない。

乞い求める人は施捨者に会えば喜び、心満足して喜び、望みが得られて喜ぶ。施捨者たる菩薩は、乞い求める人を見れば喜び、満足して喜び、心で望んだ通りに得られて喜び、乞い求める人[を見ること]により施捨者は最大限喜ぶ。

このように、施捨する慈悲深き菩薩は、乞い求める人の喜びより勝って[大いに喜ぶ]。同様に、乞い求める人は施捨者に会えなければ喜ばず、自分の望んだようにならず喜ばず、心満足せず喜べない。そして施捨する菩薩に会えなければ喜ばず、彼の心満足せず喜ばず、望み満足せず喜べないが、[その場合の喜べない辛さは]乞い求める人よりも施捨者[たる菩薩]のほうが大きい。従って、慈

³⁰ darśanapūraṇatuṣṭim yācānake 'tuṣṭim api samāśāstim/ abhibhavati sa tāṃ dātā kṛpānur ādhikyayogena// ||43|| (長尾 2009 p.66.)

悲深き施捨者[たる菩薩]は際立った悲しみを持ち、乞い求める人の悲しみより大きく[悲しい]のである。

この一偈[即ち第 43 偈]は実に、布施波羅蜜の特に優れた功德(guṇa)を説いている。

(MSA XVI v.52)³¹ <MSAVBh D36b4~ ; P42b4~ >

さらに次の[第 52 偈からの]六偈は、六波羅蜜が究極であり、最高であり、最上であり、最善であることを説く。そこで、

「布施は、⁽¹⁾依所(aśraya)により、⁽²⁾事物(vastu)により、⁽³⁾動因(nimitta)により、⁽⁴⁾廻向(pariṇāmana)により、⁽⁵⁾原因(hetu)により、⁽⁶⁾智(jñāna)により、⁽⁷⁾福田(kṣetra)により、⁽⁸⁾依拠(niśraya)によって、最高であると考えられる」(v.52)

等々と[六波羅蜜が同様に六偈において]説かれる。

ここで、八種の最高を持つことにより布施は最高である、という。八種の最高とは、最高の⁽¹⁾依所(aśraya)、最高の⁽²⁾事物(vastu)、最高の⁽³⁾動因(nimitta)、最高の⁽⁴⁾廻向(pariṇāmana)、最高の⁽⁵⁾原因(hetu)、最高の⁽⁶⁾智(jñāna)、最高の⁽⁷⁾福田(kṣetra)、最高の⁽⁸⁾依拠(niśraya)、である。

(1)そのうち、「⁽¹⁾依所(aśraya)とは菩薩である」と言われる³²。依所は施者であるが、[一般の]施者、凡夫(prthagjana)、声聞(śrāvaka)、独覚(pratyekabuddha)ではなく、菩薩が最高の依所である。

(2)「[布施の]⁽²⁾事物(vastu)であるが、財施の中では内的[身体的]な事物[の布施]が最高[の布施]である」と言われる³³。布施の事物は三種であり、即ち、財施(āmiśadāna)、無畏施(abhaya-)、法施(dharma-)である。財施にはまた二種あり、即ち、財物・穀物(*dhanadhānya)などの外的事物を施すこと、そして頭や手足などの内的[身体的]事物を施すこと、とである³⁴。このうち、内的[身体的]事物、即ち頭や

³¹ āśrayād vastuto dānaṃ nimittāt pariṇāmanāt/ hetuto jñānataḥ kṣetrān niśrayāc ca param matam// ||52|| (長尾 2009 p.75,10-11.)

³² = MSABh ad v.52: tatra³²āśrayo bodhisattvaḥ. (長尾 2009 p.75,12.)

³³ = MSABh ad v.52: **vastu** āmiśadānasyādhyātmikam vastu paramam. (長尾 2009 p.75,12.)

³⁴ Cf. DāP 1*,26-31: tatra sarvadānaṃ katamat. sarvam ucyate samāsato dvidvidhaṃ deyavastu, ādhyātmikam ca bāhyaṃ ca. tatra, ā majjñāḥ svadehaparitṛyāgo bodhisattvasya kevalādhyātmikavastuparityāga ity ucyate. etad yathoktaṃ sthāpayitvā pariśiṣṭadeyavastuparityāgo bāhyadeyavastuparityāga evety ucyate. 「(問) また一切布施とは何か。(答) 一切と言われるのは、総括して二種類の与えうる物である。すなわち内的なもの(ādhyātmika)と外的なもの(bāhya)とである。骨髄に至るまで自己の身体[のみ]を施与するのを「菩薩の内的事物専一の施与(kevalādhyātmikavastuparityāga)」と言う。 以上述べられたものを除外して、他

手足などを施すのが、財施の中で最高である。

「無畏施(abhayadāna)の中では、悪趣(apāya)や輪廻(saṃsāra)への畏れから[離れるところ]の無畏施が[最高である]」と言われる³⁵。無畏施にも二種あり、突然性無畏施と進路的無畏施³⁶である。突然性無畏施は、王[難]、盜賊[難]、火[難]、水[難]などによる災難が生じた際に行うものであり³⁷、進路的無畏施は、[地獄等の]悪趣に堕ちた災難や、輪廻に入っている災難において行うものである。この[悪趣と輪廻の]二処に堕ちないように護るのが進路的無畏施である。悪趣と輪廻に堕ちる畏れのないように施捨するのが、最高の無畏施である。

また、凡夫達の心の中で[四]聖諦(āryasatya)が観得され、預流果(°srotaāpattiṭṭhala)を得るか、初地(°prathamabhūmi)を得て、悪趣の災難から逃れるのであるが、それは何故かと言えば、[四聖]諦(āryasatya)を観得すると五つの災難から抜け出すからである。預流[果]そして初地へ進行した者達は、阿羅漢果(°arhattavaphala)を確立するか、あるいは仏位を得て、輪廻の災難から逃れるのである。何故かと言えば、その後には煩惱(kleśa)の力が消滅するからである。

「法施(dharmadāna)においては、大乘が[最高である]」と言う³⁸。法施においては、世間的なる論書や医療³⁹を布施したり、声聞・独覚の教え(法)を布施することもあろうが、しかし、大乘の法を説示し授与するのが最高の法施である、ということである。

(3) 「⁽³⁾動因(nimitta)は悲愍である」と言う⁴⁰。今この時に施者に施捨させる動因(nimitta)、というものが、悲愍(karuṇā)である。財ある衆生が貧窮に苦しむ人々を見た時、悲愍によって施捨するのである。悲愍[の心]によって施捨するのであるから、[悲愍が]最高の動因である。

(4) 「⁽⁴⁾廻向(pariṇāmanā)は、その[布施]によって、大菩提なる結果を請い願うことである」と言う⁴¹。菩薩は、布施を行う時、神・人等が享楽を[得ることを]

の与えうる物の施与を実に「[菩薩の]与えうる外的事物専一の施与」と言う(矢板 2008 p.167.)。

³⁵ = MSABh ad v.52: abhayadānasyāpāyasaṃsārābhītebhyas tu tadabhayam. (長尾 2009 p.75,12-13.)

³⁶ D: yun du mi 'jigs pa sbyin pa'o, P: yul du mi 'jigs pa sbyin pa'o. この直後に二度同じ言葉が出てくるが、二度目では P: yun du である。

³⁷ Cf. DāP 13*,19-20: abhayadānam siṃhavyāghragrāharājacorodakāgnyādibhayaparitrānatayā veditavyam. 「無畏施とは、ライオン、虎、鱈[類]、王、盜賊、水、火などの脅威から守護することによる、と理解すべきである」。(矢板 2008 p.189.)。

³⁸ = MSABh ad v.52: dharmadānasya mahāyānam. (長尾 2009 p.75,13.)

³⁹ 「医療」の後に byad (P: dpyad) daṅ gta rag (?) とあるが、意味不明のため訳していない。

⁴⁰ = MSABh ad v.52: nimittam karuṇā. (長尾 2009 p.75,13.)

⁴¹ = MSABh ad v.52: pariṇāmanā tena mahābodhiphalaprārthanā. (長尾 2009 p.75,13-14.)

願って廻向するのではなく、声聞が涅槃を獲得するように廻向するのではなく、菩薩なる果を獲得させるためである。だから[大菩提を願うことが]最高の廻向なのである。

(5) 「⁽⁵⁾原因(hetu)は以前に[行じた]布施波羅蜜の修習の薫習である」という⁴²。他生における無貪(alobha)等の三善根(*tri-kuśalamūla)により心を修練した者が、布施等の所行を修習し、その流れが薫習して残る。その薫習(vāsanā)が布施波羅蜜(dānapāramitā)を起こさせるので、これが最高の原因(hetu)である、ということである。

(問) ⁽³⁾動因(nimitta)と⁽⁵⁾原因(hetu)の二者に如何なる相違があつて二種であるのか？。(答)原因(hetu)は独自の(asādhāraṇa)因である。例えば、[花などの]芽(aṅkura)に対して種(bīja)が[原因(hetu)]である。一方、動因(nimitta)は協働する(*sahakārin)因である。例えば、芽(aṅkura)に対しての地、水、火、風の四が[動因(nimitta)]である。これと同様に、布施の場合でも、他生において[行った]布施等の善行の修習が薫習されることが、[芽(aṅkura)に対する]種(bīja)と同等の、独自の(asādhāraṇa)因[即ち、原因(hetu)]である。ここでは、諸衆生に対する悲愍(karuṇā)は協働する(*sahakārin)因[即ち、動因(nimitta)]である。[芽(aṅkura)に対しての]地、水、火、風のように。

(6) 「⁽⁶⁾智(jñāna)とは無分別[智]である」という⁴³。最高の智は、無分別智(nirvikalpañāna)で修練している時のものであり、[それが]最高の智である。その[無分別]智によって、施捨する菩薩、施物、受者の三者が分別されることなく、即ち、三輪(trimaṇḍala)を[分けて]認識しない形で布施がなされているから、最高の智なのである。

(7) ⁽⁷⁾福田(kṣetra)について⁴⁴ 「求める者(arthin)と」云々。布施には五つの福田(kṣetra)がある。バラモンや商人などで[何かを]乞い求める者が、「求める者(arthin)」なる福田である。病者などが「苦しむ者(duḥkhita)」という福田である。食物や衣服などを欠乏する者達が「依所の無い者(nihpratisaraṇa)」という福田である。渴望のために殺生等の罪を犯す者達が「悪行を行う者(duṣcaritacārin)」という福田である。戒律(sīla)を保持する者や般若智(prajñā)を有する者達が「有徳者(guṇavat)」という福田である。

⁴² = MSABh ad v.52: **hetuḥ** pūrvadānapāramitābhyāvāsānā. (長尾 2009 p.75,14.)

⁴³ = MSABh ad v.52: **jñānam** nirvikalpaṃ yena trimaṇḍalaparīśuddham dānaṃ dadāti dātṛdeyapratigrāhākāvikalpanāt. (長尾 2009 p.75,14-15.) 「智は無分別[智]である。これによって、施者・施物・受者[の三輪]を分別しないから、三輪清浄の布施を行うのである」。

⁴⁴ = MSABh ad v.52: **kṣetraṃ** pañcavidham. arthī duḥkham niḥpratisaraṇo duṣcaritacārī guṇavāms ca. (長尾 2009 p.75,15-16.) 「福田は五種である。即ち、求める者、苦しみ、依所の無い者、悪行を行う者、有徳者である」。

「菩薩にとっては、前の[四者][即ち、求める者、苦しむ者、依所の無い者、悪行を行う者]の福田が、より高く良いものである」という⁴⁵。

声聞や世間一般の人達の仕方では、求める者の福田より苦しむ者の福田がより良い福田であり、また、邪行者[の福田]より[第五の]有徳者(guṇavat)の福田を、より良いものと考え[て施捨する]。しかし菩薩はそうはしない。[第五の]有徳者の福田より邪行者の福田を、より良いものと考え、苦しむ者の福田よりも求める者の福田を、より良いものとして[して施捨]する。こうして、諸菩薩は[第五の有徳者よりも]前の四者[、即ち、求める者、苦しむ者、依所の無い者、悪行を行う者]の福田に施捨する。

そして、もし、前の四者が存しない時には、第五の有徳者の福田に施捨するのである⁴⁶。何故かと言えば、福德(punya)を生み出しつつ福利を求める[施者]達は、有徳者の福田に施捨するが、諸菩薩は、福德を生み出し福利を求めて布施・施捨をするのではない。苦しみ、心乱れ、そして貧しい諸衆生の苦しみを取り除くために、布施・施捨をするのであるから、求める者の福田や苦しむ者の福田には施捨するが、有徳者の福田には施捨しないのである。

(8) 「それに依拠して布施する、それが⁽⁴⁸⁾依拠(niśraya)である」という⁴⁷。依拠(niśraya)とは、或る作意に依拠して人が施物を施捨する、というもので、[依拠には]⁽⁴⁹⁾信解(adhimukti)に依拠する場合と、⁽⁵⁰⁾思惟(manaskāra)に依拠する場合と、⁽⁵¹⁾三昧(samādhi)に依拠する場合、の三つがある。

「⁽⁴⁹⁾信解(adhimukti)は、[先に第 16 偈の注解の中で、波羅蜜の]修習を分類した際に、信解による思惟として説かれた」という⁴⁸。即ち、信解(adhimukti)への依拠は、以前[第 16 偈の注解の中で]、修習を分類した際に説かれたところの、信解による思惟(adhimuktimanaskāra)がそれである。そこでどのように説かれたのかといえば、布施波羅蜜から般若波羅蜜の六波羅蜜を具えた大乘經典において、正しく説かれ善説され、厚い信仰によって信解され、淨信されている。

「⁽⁵⁰⁾思惟(manaskāra)は、同じその[第 16 偈の注解の中]で」云々⁴⁹と[説かれている]。思惟への依拠は、[第 16 偈の注解の中で]修習を分類した際に説かれたが、

⁴⁵ = MSABh ad v.52: caturṇām uttaram kṣetraṃ param. (長尾 2009 p.75,16.)

⁴⁶ Cf. MSABh ad v.52: tadabhāve pañcamam. (長尾 2009 p.75,17.)

⁴⁷ = MSABh ad v.52: niśrayas trividho yaṃ niśritya dadāti, adhimuktir manasikārah samādhiś ca. (長尾 2009 p.75,17-18.)

⁴⁸ = MSABh ad v.52: adhimuktir yathā bhāvanāvibhāge 'dhimuktimanaskāra uktaḥ. (長尾 2009 p.75,18.) Cf. MSABh ad v.16: manasikārasaṃniśritā pāramitābhāvanā caturākārā. 1) adhimuktimanaskāreṇa sarvapāramitāpratīṣayuktam sūtrāntam adhimucyamānasya. 2) (長尾 2009 pp.24-25.)

⁴⁹ = MSABh ad v.52: manaskāro yathā tatraivāśvādanānumodanābhinandanamanaskāra uktaḥ. (長尾 2009 p.75,18-19.)

そこで思惟は三種あると説かれた。即ち⁵⁰、賞味(āsvādāna)による思惟と、随喜(anumodāna)による思惟と、希望(abhinandāna)による思惟である。

そのうち、以前、布施等の波羅蜜を行じた後に、「私が以前に布施を行じたのは良かった」と感じるのが、賞味(āsvādāna)である。十方世界の諸衆生に布施を行じた際に、心喜ぶのが、随喜(anumodāna)である。未来に生まれるたびに布施を行じて喜び、諸衆生が未来に生まれるたびに布施を受けて喜ぶのが、希望(abhinandāna)である。

「⁽ⁱⁱⁱ⁾三昧(samādhi)は虚空蔵[三昧]等であり、同じくその[第 16 偈の注解の中]で自在性と説かれたものである」⁵¹。三昧に住すれば、八地(āṣṭamakabhūmi)等に行じる諸菩薩は、無行般涅槃(*anabhisamskārapariṇvāna)の道により虚空蔵三昧を行じ、[施]物を自在に虚空から受け取って[それを]施捨する。また彼は、修習が分散した際には三種の富を用意する。虚空蔵[三昧]等の三昧は三種の富の一つにする。

三種の富とは、身体自在、生活自在、教誡自在である。そのうち、身体自在とは、如来の法身(dharmakāya)と報身(sambhogakāya)である。この二身は、無障礙の布施である。生活自在とは、応身(nirmāṇakāya)であり、応身によって諸衆生を多様な身体に変現させる布施を行じている。教誡自在とは、無障礙なる、無執着なる、そして偉大なる六波羅蜜のことである。

⁵⁰ Cf. MSABh ad v.16: 2) āsvādānāmanaskāreṇa labdhāḥ ... , 3) anumodānāmanaskāreṇa, 4) abhinandānāmanaskāreṇātmanaḥ (長尾 2009 p.25,1-4.)

⁵¹ = MSABh ad v.52: samādhir gaganagañjādir yathā tatraiva vibhutam uktam. (長尾 2009 p.75,19.) また、Cf. 長尾 2009 p.34.